

Jリーグ J.LEAGUE IMPACT REPORT インパクトレポート2024

サステナビリティ活動に関する報告書

2025年5月27日

J.LEAGUE

全体アジェンダ

イントロダクション

野々村 芳和 チェアマンメッセージ	3
-------------------	---

I Jリーグが目指す世界観

1. フットボールの土台となる 活力ある社会と健全な地球環境	5
2. Jリーグのサステナビリティ〜3つのテーマ〜	6

II ミッション実現のための歩み

1. Jリーグの“サステナビリティ”の歩み	8
2. テーマ実現のためのロードマップ	9

III 3つのテーマの取り組みと共創事例

1. 2024シーズンまでの取り組み	11
2. 気候アクション	
- ロードマップ	13
- サステナビリティ事業活性化プロジェクト	14
- アンケート調査結果	16
- Jリーグ・クラブの活動事例	17
- Jリーグとパートナー企業の活動事例	23

III 3. インクルーシブな社会へ

- ロードマップ	28
- 目的別クラブの取り組み実施状況	29
- 来場者データ	30
- クラブの活動事例	31
- Jリーグとパートナー企業の活動事例	37

4. 地域コミュニティの醸成

- ロードマップ	39
- ホームタウン活動調査	40
- 2025 Jリーグチャレン！ アウォーズ受賞活動	41
- Jリーグとパートナー企業の活動事例	44

2024シーズンの振り返りと今後の展望

サステナビリティ担当執行役員 辻井隆行メッセージ	47
--------------------------	----

野々村 芳和 チェアマンメッセージ

～Ｊリーグがつなぐ持続可能な未来へ～

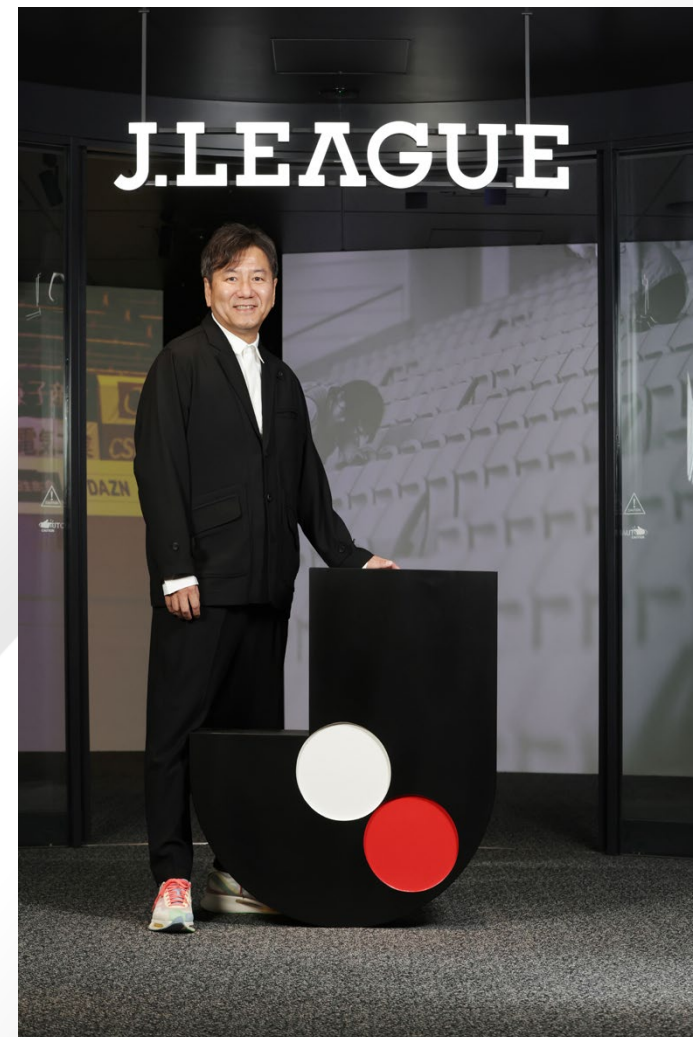
Ｊリーグは1993年の開幕後、地域と一体となったクラブづくりを重要な活動方針と定め、地方自治体、地域のスポンサー企業、ファン・サポーター、地域のメディア、クラブ運営を支えていただいている数多くの地域社会の皆さまと共に、ホームタウン活動を進めてきました。

さらに、2018年の開幕25周年を機に「Ｊリーグをつかおう！」を合言葉として、3者以上で共通の社会課題を解決する社会連携活動を「シャレン！」と称し、活動のインパクトをより多く生み出す共創モデルの活動を推進してきました。

そうした中で、近年は非常に激しい雨や台風によってＪリーグの試合が中止になるなど、Ｊリーグが目指す「安心安全な運営」自体にも危機感を持たざるを得ない環境となってきました。そこで、Ｊリーグは2021年に環境省と連携協定を締結し、全国にある60クラブと連携しながら同省の知見も活用することで、より一層の各種環境施策を展開してきました。

また、開幕30周年を迎えた2023年に、これらの取り組みを統合してさらに推進するため、社会連携部を引き継ぐ「社会連携グループ」に気候変動と地域活性に取り組む「気候アクショングループ」を加えた「サステナビリティ部」を新設。持続可能な社会の実現に向けて日々、取り組みを推進しています。

本レポートを通じて、これまでの活動とその成果を可視化し、社会に対してより効果的に伝えることを目指しています。今後も、地域の人々と連携し、多くのステークホルダーを巻き込みながら、Ｊリーグとして目指す方向性を共有し、社会全体の持続性を高めていく、その一助になればと考えています。



1.

Jリーグが目指す世界観



1. フットボールの土台となる活力ある社会と健全な地球環境

Jリーグは、プロスポーツを運営するとともに、豊かなスポーツ文化の醸成を実現することを理念に掲げ、多くの人々が気軽にスポーツを楽しめるように、クラブは地域スポーツの振興活動を積極的に行っています。

また、その土台である活力ある社会と健全な地球環境をつくることにも地域と連携して取り組んでいます。

活力ある社会
People & Community

健全な地球環境
Planet



2. Jリーグのサステナビリティ～3つのテーマ～

Jリーグは2024年、サステナビリティ領域での取り組みを「気候アクション（PLANET）」、「インクルーシブな社会へ（PEOPLE）」、「地域コミュニティの醸成（COMMUNITY）」という3つのテーマで再整理し、Jリーグ全60クラブで地域の多様なステークホルダーと共に社会課題を解決していくことを目指しています。

この3つのテーマは、それぞれが相互に関係しており、それぞれの領域で活動を進めることにより、相互に好循環を生み出し、高めていくことができると考えています。

Jクラブにおいて重要なホームタウンという場所を中心に、これまで同様シャレン！という手法も最大限活用しながら、Jリーグ全体でサステナビリティ活動を推進していきます。

インクルーシブな社会へ

子ども／高齢者／障がい者／外国人etc.

ホームタウン

地域コミュニティの醸成

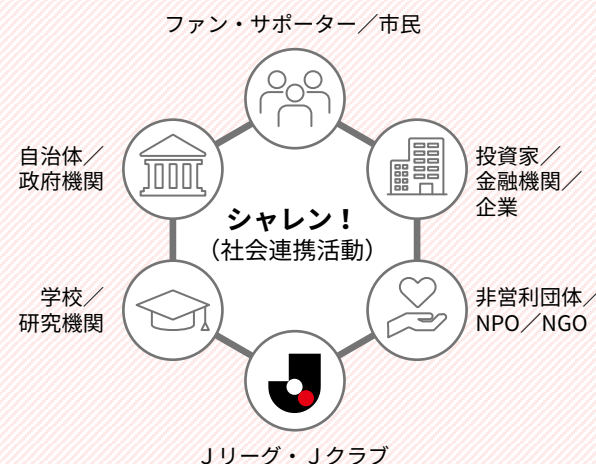
相互理解／相互扶助／地域住民のつながり／ソーシャルキャピタル

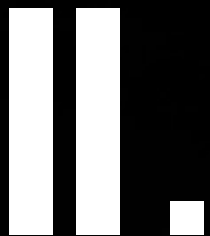
気候アクション

カーボンニュートラル／学びの場／社会システムチェンジの促進

シャレン！（社会連携活動）とは？

社会課題や共通のテーマ（教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流など）に、地域の人・企業や団体（営利・非営利問わず）・自治体・学校などとJリーグ・Jクラブが連携して、取り組む活動です。





ミッション実現のための歩み

1. Jリーグの“サステナビリティ”の歩み



Jリーグ パートナー企業との 取り組み

- ・ Be supporters！（2020年～サントリーウエルネス株式会社）
- ・ ソナエルJapan杯（2021年～LINEヤフー株式会社 ※旧ヤフー株式会社）
- ・ TH!NK THE BALL PROJECT（2023年～NTTグループ）
- ・ シャレン！で献血（2023年～明治安田生命保険相互会社）
- ・ Jリーグ×小野伸二 スマイルフットボールツアー for a Sustainable Future supported by 明治安田（2024年～明治安田生命保険相互会社、アディダスジャパン株式会社／株式会社モルテン／日本航空株式会社／ヤマザキビスケット株式会社／花王株式会社）

2. テーマ実現のためのロードマップ

短期 >>>>>>>>>> 中期 >>>>>>>>>> 長期

PLANET
気候アクション

▶ 意識が変わる

気候変動とサッカーには深い関係があり、サッカーファミリーはその解決の力になれるという意識が定着している

▶ 行動が変わる

地球とサッカーを守るため、カーボンニュートラルを意識した選択と行動がサッカーファミリーのスタンダードになっている

▶ 仕組みが変わる

ホームタウン全てで、カーボンニュートラルと地域活性化を両立するための社会システム実現が進んでいる

PEOPLE
インクルーシブな社会へ

▶ 理解と共感が深まる

多様な人々・多世代（老若男女や障がいのある方、外国人など）がサッカーファミリーとして交流し、お互いの理解と共感が深まっている

▶ 行動が広がる

周囲を思いやり、助け合って行動するサッカーファミリーが増え、それぞれの日々の活力や生きがいにつながっている

▶ 文化が根付く

クラブをハブとしたサッカーファミリーのつながりによって、共に楽しみ支え合う文化が根付いている

COMMUNITY
地域コミュニティの醸成

▶ 関心が高まる

スタジアムやクラブの関連施設、地域におけるクラブをハブとした活動を通じて、サッカーファミリーの地域への関心が高まっている

▶ 活動が活発になる

サッカーファミリー同士が声を掛け合い、地域の発展や課題解決に取り組む人々が増え、コミュニティ活動が活発になっている

▶ 日常的に支え合う

サッカーファミリーによるコミュニティが地域社会にとって欠かせない存在になり、地域の人々が日常的に支え合っている

サッカーファミリーとは：日本サッカー協会（JFA）において、サッカーに関わる全ての人々を「サッカーファミリー」と定義しています。

参照：ドキュメント | JFA | 日本サッカー協会



3つのテーマの取り組みと共創事例

1. 2024シーズンまでの取り組み



PLANET

気候アクション

2021年の環境省との連携協定の締結をきっかけに、Jリーグは本格的に気候変動への取り組みを開始。**2023年より、Jリーグ全公式試合（年間約1,200試合）の電力を再生可能エネルギーでまかなうことで、電力由来のCO2排出量を実質ゼロとしています。**

リーグ全体で目指すべき方向性を明確にするために、**2024年には気候アクションロードマップを策定。**また、各クラブの気候アクションの活動状況を“見える化”する取り組みを行いました。今後は「サステナビリティ事業活性化プロジェクト」（※P14に詳細記載）の下、本領域における活動をさらに推進していく予定です。



PEOPLE

インクルーシブな社会へ

2023年より、各クラブによる“インクルーシブ”に関する取り組み事例を収集し、広く情報共有を行ってきました。Jリーグでは、これまで同様に多様な人々・多世代に向けた6つの目的（「障がいのある方」、「外国人」、「子どもの支援」、「高齢者」、「ジェンダー平等」、「さまざまな方が一緒に活動」）に沿った活動を推進しており、**全60クラブが少なくともいずれかの取り組みを行っている**状況です。今後、リーグ全体で活動の“質”をより高めていくための取り組みも進めていきます。



COMMUNITY

地域コミュニティの醸成

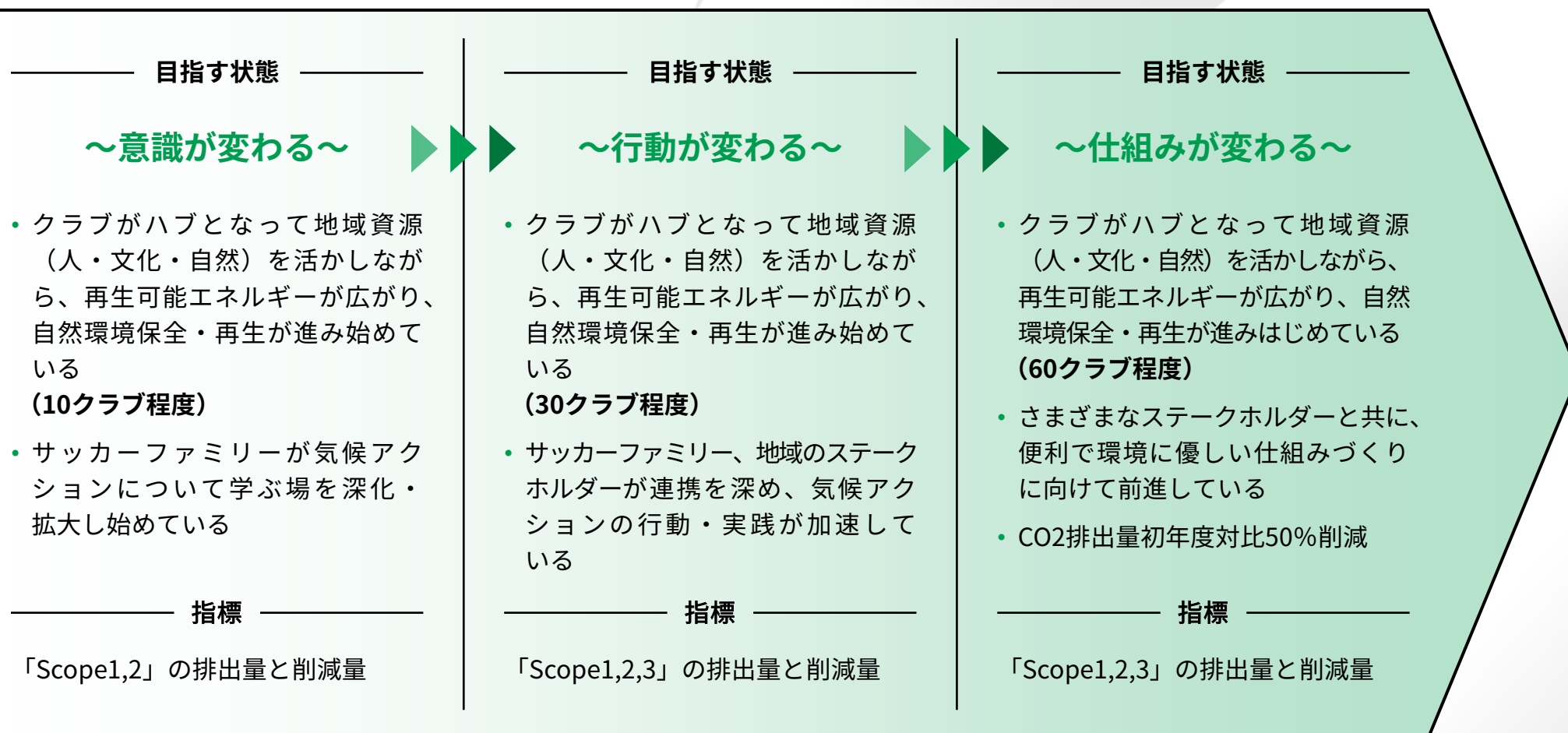
地域密着を掲げるJリーグは、これまで地道にホームタウン活動、そして社会連携活動（シャレン！）に取り組んできました。クラブは、スタジアムやクラブの関連施設、地域においてハブとしての役割を担っており、現在60を数えるJクラブは、それぞれの地域を中心に**年間3万2,000回以上のホームタウン活動**を行っています。実施活動の目的は、サッカー普及や地域スポーツ振興にとどまらず、介護予防・健康増進や教育といった地域の発展や、地域が抱える課題の解決に向けた活動に幅広く取り組んできました。地域の人々が互いに支え合う社会の実現を目指し、今後も活動を続けていきます。



気候アクション

2. 気候アクション | ロードマップ

短期（2024-2025） >>>>>> 中期（2027） >>>>>> 長期（2030）



Scope1：燃焼によって直接的に排出される温室効果ガスの量
 Scope2：供給される電気の使用に伴って排出される温室効果ガスの量
 Scope3：Scope1、Scope2以外に間接的に排出される温室効果ガスの量

※本ロードマップは2023年に策定したものであり、2025年中に改訂版を策定予定

2. 気候アクション | サステナビリティ事業活性化プロジェクト

気候変動の影響はかつてないほどに顕在化・常態化しているため、Jリーグは2025シーズンより以下の「サステナビリティ事業活性化プロジェクト」を実施する予定であり、Jリーグと各クラブのサステナビリティ事業を戦略的かつ効果的に推進するためのプラットフォームを作ることによって活動を後押ししていきたいと考えている。

背景

- 気候変動の影響はかつてないほどに顕在化・常態化
- 世界の潮流として、2040年カーボンニュートラル(2030年50%削減)を目指すこと、併せてGHG(CO₂)排出量(Scope1,2,3)の開示が求められるようになってきている



サステナビリティ事業活性化プロジェクト ※2025年4月より順次開始

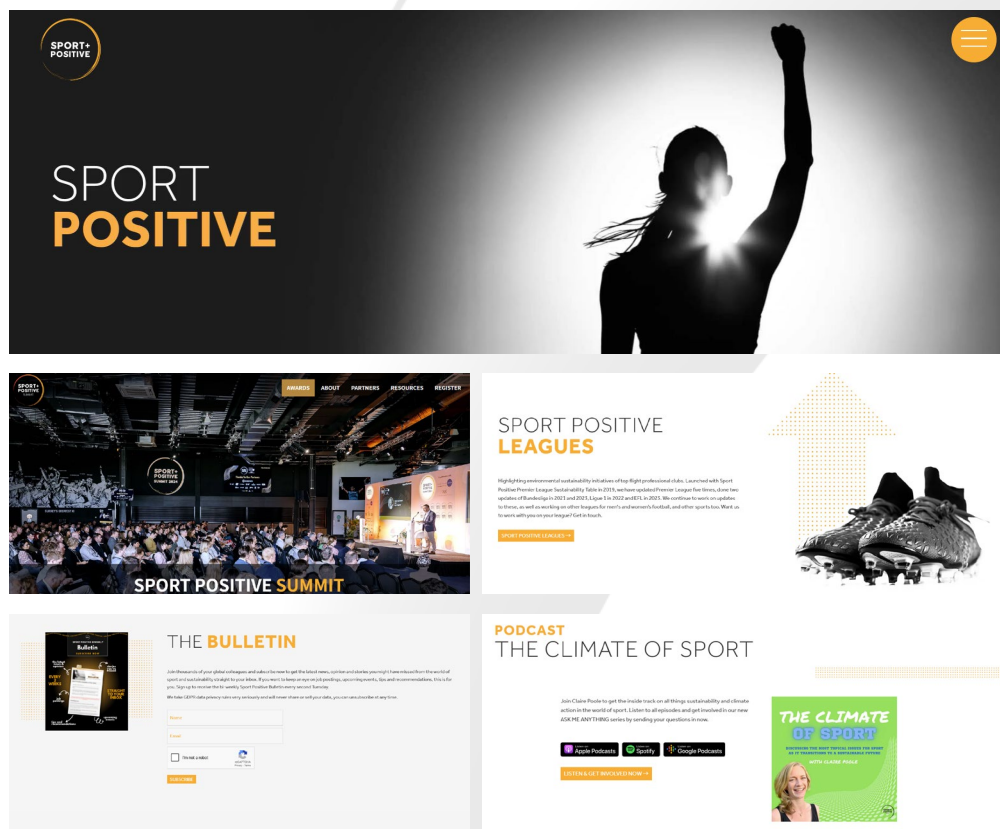
目的・趣旨

Jリーグと各クラブのサステナビリティ事業を戦略的かつ効果的に推進するためのプラットフォームを作り、活動を後押しすること

主な内容

- **Sport Positive Leagues (SPL) への参画** ※詳細はP15記載
 - リーグ全体の気候アクションの可視化
- **活動助成金制度の創設と配分**
 - クラブのSPL参画支援を用途した活動原資
- **Jリーグ気候アクションハンドブックの作成、配布、援用支援**
 - クラブのSPL参画支援を用途した手引き
- **ロードマップ作成支援キット開発／提供、教育プログラム開発／提供**
- **気候アクション動画の制作と発信**
- **「Jリーグインパクトレポート2024」の作成と情報発信**
- **国内外視察**
- **ワークショップ・研修会開催**

参考 | Sport Positive Leagues (SPL) について



Sport Positiveとは	気候変動、持続可能性、環境保護、生物多様性といった領域において世界のスポーツ組織を支援することを目的として設立された英国を拠点とする組織
設立年	2018年
創設者	Claire Poole（クレア・プール）
主な活動内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. SPORT POSITIVE SUMMITの開催 2. SPLの実施 3. 気候アクションを中心としたサステナビリティに関するニュースレターの発信 4. ニュースレター同様、気候アクションを中心としたサステナビリティに関してポッドキャストにて発信

SPLとは、サッカークラブの気候アクションを定量的に“見える化”し、その進捗や目指すべき方向性を一目で把握できる仕組み

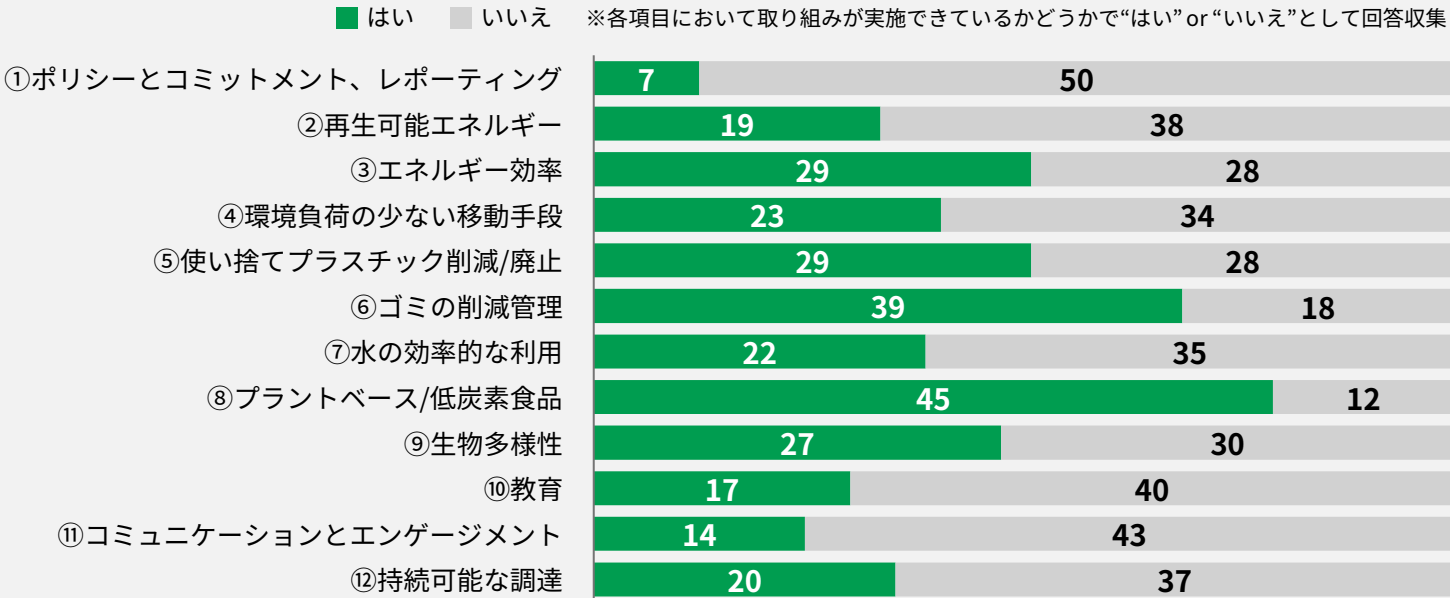
詳細情報：[Sport Positive 公式HP](#)

2. 気候アクション | アンケート調査結果

今後Jリーグとして、SPLの評価項目に沿って気候アクションに関する事業を推進していくにあたり、まずは各クラブの活動状況を把握するためのアンケートを実施した。

気候アクションに関するアンケート調査結果サマリ

2024年10月30日～11月22日に全60クラブを対象として以下12項目を実施。
うち回答のあった57クラブを分析。



項目内容の一部補足説明

- ①……気候アクションを含むクラブのサステナビリティ領域における方針／戦略
- ⑧……スタジアムでのビーガンフードのオプション提供や地元で調達された食材をクラブの施設で導入
※ただし、本アンケート調査においては⑧の対象にフードドライブなど食に関わるその他の活動も含むため、SPL評価の実態とは異なる調査結果となっている
- ⑩……トップチーム選手やスタッフ、アカデミー選手など、クラブの関係者へのサステナビリティ教育
- ⑪……①の内容や活動内容をクラブ公式HP上で発信することや、その発信を通じたファン・サポーターへの行動呼び掛け

サマリ



- ・リーグ全体として、全ての項目において幅広くクラブが取り組みを行っている。
- ・一方で、各項目において“いいえ”で回答しているクラブ（グラフ上の右側灰色）の数もまだ多いことから、今後の活動を推進させていく上での伸びしろがある。※特に①⑩⑪



各項目別の具体的な活動事例を次スライド以降に記載

2. 気候アクション | Jリーグ・クラブの活動事例

1 ポリシーとコミットメント、レポーティング

清水エスパルス

ゼロカーボン プロスポーツクラブ宣言

清水エスパルスは2007年より「地球にやさしいサッカークラブであるために。次世代に快適にサッカーのできる環境を引き継いでいくために。」をコンセプトに掲げ、クラブのサステナビリティの1つとして「エスパルス エコチャレンジ」を開始。2021年11月、2050年までの脱炭素社会の実現をはじめ、SDGs達成への貢献、そしてこれまでクラブが継続的に取り組んできたエスパルス エコチャレンジのさらなる充実を目指す。SDGs推進クラブとしてスポーツの力で持続可能な社会の実現に向け、地域と共に力強く歩みを進めていく意志を持ち、「ゼロカーボン プロスポーツクラブ宣言」を表明している。

詳細情報：清水エスパルス 公式HP



©S-PULSE

2 再生可能エネルギー

セレッソ大阪

ヨドコウ桜スタジアムにおけるホームゲーム時は100%再生可能エネルギーで稼働

セレッソ大阪のホームゲーム時は再生可能エネルギー100%の電気を使用しており、同エネルギー電気を供給していることを証明する「EnneGreen®提供証明書」の認定を受けている。また、スタジアムとクラブハウスで太陽光発電システムを稼働させている。

※Jリーグとして全公式試合（年間約1,200試合）で、会場で使用する電力は再生可能エネルギーでまかなっており、後述P26にて詳細記載

詳細情報：セレッソ大阪 公式HP



©CEREZO OSAKA

2. 気候アクション | Jリーグ・クラブの活動事例

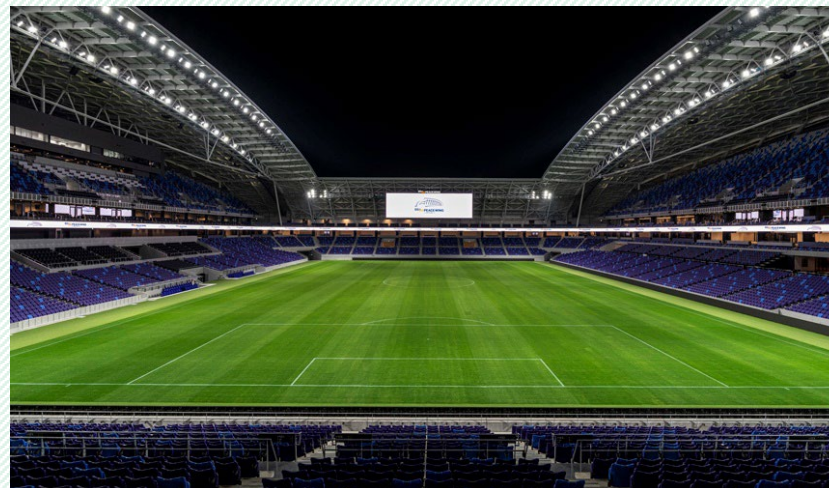
3 エネルギー効率

サンフレッチェ広島

エコスタジアム「環境にやさしいサッカースタジアム」の実現に向けた取り組み

広島市が掲げている温室効果ガス排出量の削減目標に沿った形で、サンフレッチェ広島のホームスタジアム「エディオンピースウイング広島」でも省エネルギー対策の推進や再生可能エネルギーの導入促進といった、さまざまな取り組みを行っている。

[詳細情報：広島市 公式HP](#)



©2024 S.FC

4 環境負荷の少ない移動手段

モンテディオ山形

自家用車での来場台数を減らすためにさまざまな施策を実施

公共交通機関の利用促進策として、電車の切符または乗車履歴を提示した来場者にドリンク引換券をプレゼントする取り組みや、4人以上で乗り合わせて来場した方に、スタジアムに近い優先駐車場への案内を行うことで、環境負荷の少ない移動手段の利用を促進している。

※また、2025シーズンからは山形駅とスタジアム間のシャトルバス運行を再開予定

[詳細情報：モンテディオ山形 公式HP①](#)

[詳細情報：モンテディオ山形 公式HP②](#)



©MONTEDIO YAMAGATA

2. 気候アクション | Jリーグ・クラブの活動事例

5 使い捨てプラスチック削減／廃止

ヴァンフォーレ甲府

2004年から続く「エコスタジアムプロジェクト」

使い捨て容器ごみ削減のため、リユース食器の導入・ごみの分別回収などさまざまな環境活動を2004年より「エコスタジアムプロジェクト」として長年継続的に実施。リユース食器の導入によるCO2排出量削減に貢献した数量についても公表を行っている。また、オフィスにおいて必要以上のペットボトルを消費しないためにマイボトルの利用推奨に取り組むなど、スタジアム以外のクラブの関連施設においても活動を実施している。

※日本財団が進めるスポーツ界横断の使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクト「HEROs PLEDGE」（ヒーローズブレッヂ）へも参画中

詳細情報：ヴァンフォーレ甲府 公式HP①

詳細情報：ヴァンフォーレ甲府 公式HP②



©VFK

CO2排出量の削減効果

石油を原料とするプラスチックの製造や廃棄には多くのCO2が排出されるため、使用料の削減、リサイクル素材の採用、リユース食器の導入などはCO2削減に貢献します

6 ゴミの削減管理

湘南ベルマーレ

「湘南地域に繋ぐ栄養満点 有機土壌でミニトマト栽培プロジェクト ～将来を担う子どもたちのために サステナブルな健康をプレゼント～」開始

湘南ベルマーレのトップチーム選手やアカデミー（ジュニアユース、ユース）選手に食事を提供する食堂から排出される残渣（野菜の切れ端やフルーツの皮など）をコンポスターに投入し有機土壌を育成。その有機土壌を地域にお裾分けして春先からミニトマトを栽培し、初夏から夏にかけて生える栄養満点のミニトマトを子どもたちが食べることで「栄養」が次世代へとつながっていくことを目標に推進している。

詳細情報：湘南ベルマーレ 公式HP



©SHONAN BELLMARE

CO2排出量の削減効果

ゴミの収集、運搬、焼却施設での処理などで多くのエネルギーが消費されるため、ゴミの削減管理はCO2削減に貢献します

2. 気候アクション | Jリーグ・クラブの活動事例

7 水の効率的な利用

ジェフユナイテッド千葉

水の効率的な再利用を実施

スタジアムでは雨水の活用。選手練習場天然芝、クラブハウス（オフィス・ショップ含む）での水は、食堂以外では全て地下水を利用している。

CO2排出量の削減効果

水をきれいにするための浄水場、各家庭へ届けるポンプ、汚れた水を浄化する下水処理場などの各施設、スタジアムにおける芝の管理などでエネルギー（電力）が使われているため、水の効率的な利用はCO2削減に貢献します



©JEFUNITED

8 プラントベース／低炭素食品

Jリーグ

スタグルフェスで「SOYSCREAM!!!」の提供

2024年2月に国立競技場で行われた「FUJIFILM SUPER CUP 2024」の“スタグルフェス”で、不耕起栽培の大豆で作ったアイス「SOYSCREAM!!!」を提供。

詳細情報：Jリーグ 公式HP

CO2排出量の削減効果

工業畜産に必要な家畜の飼料の原料となる穀物の農地を作るためにアマゾンなどの森林が破壊されたり、燃やされたりしており、また、トラクターや農薬、化学肥料などを多用する近代農法によって健全な土壌が失われるなどして、貴重なCO2吸収源が損失しているため、プラントベース／低炭素食品（オーガニック、自然農法、環境再生型農法による野菜など）の選択肢を増やすことは、結果としてCO2削減に貢献します



©茅ヶ崎はちいち農園

2. 気候アクション | Jリーグ・クラブの活動事例

9 生物多様性

SC相模原

森をつなぐアクション

2024年5月、相模原市と「さがみはら津久井産材の利用拡大に係る連携協定」を締結。両者が持つ資源を有効活用し「さがみはら森林ビジョン」の実現と地域課題の解決を目指し連携を開始。森とファン・サポーター、そして市民とをつなぐための機会創出として、森の循環を体験できるさまざまな取り組みを実施している。

詳細情報：SC相模原 [公式HP](#)

CO2排出量の削減効果

生物多様性を守ることは、CO2吸収源である健全な森や川、海、土壌を保全することにつながるため、CO2削減に貢献します



©S.C.SAGAMIHARA

10 教育

清水エスパルス

カーボンニュートラル社内研修会

ゼロカーボン プロスポーツクラブ宣言（①ポリシー、コミットメント&レポートに詳細記載）にのっとり、全社の取り組みを継続、推進していくために、社内勉強会を実施。清水エスパルス社員・スタッフ計45名が参加した。

詳細情報：清水エスパルス [公式HP](#)



©S-PULSE

2. 気候アクション | Jリーグ・クラブの活動事例

11 コミュニケーション

FC大阪

サステナビリティプロジェクト「ACT NOW」

2030年までにクラブが現在排出しているCO2の排出量を50%オフ、2040年までにネット・ゼロ（排出量実質ゼロ）を目標に掲げ、試合運営含む組織運営の全般にわたるCO2排出量を可視化し、その算定を基に脱炭素社会を目指した施策“カーボンニュートラルアクション・プラン”＝「ACT NOW」を実施中。

※これらの内容をクラブHP上でまとめ発信している

[詳細情報：FC大阪 公式HP](#)



12 持続可能な調達

カターレ富山

環境に配慮したユニフォームやグッズの調達

グッズなどのサプライは、可能な限り配達時のCO2排出を抑えるべく地元のサプライヤーや環境に配慮したサプライヤーから仕入れており、2024シーズン時点のトップチームのユニフォームは全て100%再生ポリエステルを活用した製品としている。

[詳細情報：カターレ富山 公式HP](#)

CO2排出量の削減効果

事業を行うにはさまざまな間接購買（備品や社内で消費するお茶など）が必要となりますが、持続可能な調達を意識することで、製品の製造・輸送に伴う環境負荷を抑えることができ、結果としてCO2削減に貢献します。加えて、人権という観点からも重要です。



2. 気候アクション | Jリーグとパートナー企業の活動事例

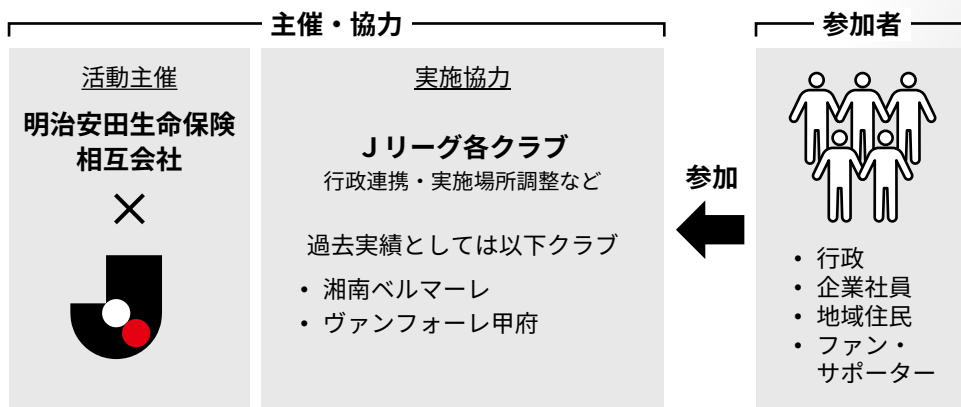
明治安田×Jリーグの森～未来をつむぐ森～

■実施概要

2023年より開始した、全国各地のクラブと連携しながら森林の再生・保全活動を行い参加者の環境意識を醸成していく取り組み。人々の暮らしを支え、豊かな恵みをもたらす日本の森林を未来世代につないでいく。

※2023,2024年についてはまずは以下記載の2クラブと活動を実施し、2025年8月にはFC岐阜と実施予定

ステークホルダー関係図・役割



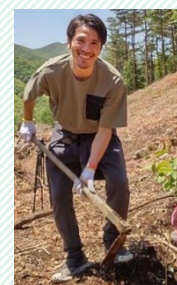
実施結果

森林整備、自然観察やクラフトなどの実施回数
と参加人数（2023～2024年延べ数）

3回 251人

植樹の参加人数と本数（1回）

114人 400本



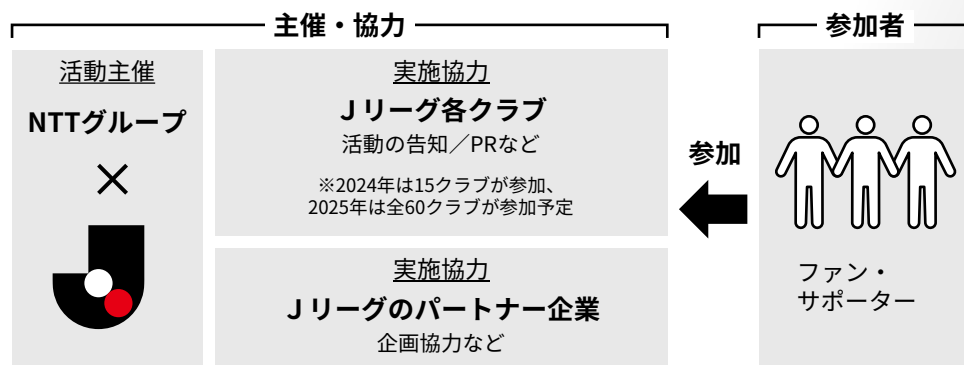
2. 気候アクション | Jリーグとパートナー企業の活動事例

TH!NK THE BALL PROJECT

■実施概要

NTTグループの持つテクノロジーを用い、ファン・サポーターが気候アクションに参加・継続しやすい仕組みづくりを2023年に開始。ファンが楽しみながら環境について意識し、それが個人の行動変容につながるような取り組み。本プロジェクトにおける主要な活動であるサステナカップ（ファン・サポーター参加型のクラブ対抗戦）は、2023年の初年度は4クラブ、2024年は15クラブで実施し、2025年より全60クラブを対象に実施予定。

ステークホルダー関係図・役割



実施インパクト

2024年サステナカップ参加人数と活動回数（投稿数） **約8,000人 64,779回**

実施後の効果※1

意識変化あり **94.1%**
 行動変化あり **53.0%**

※1 2024年12月19-21日においてサステナカップのアプリ内でアンケート調査を実施



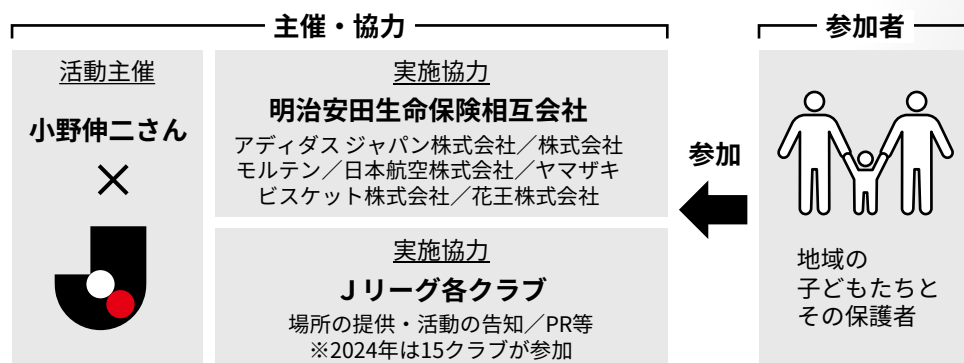
2. 気候アクション | Jリーグとパートナー企業の活動事例

Jリーグ×小野伸二 スマイルフットボールツアー for a Sustainable Future supported by 明治安田

■ 実施概要

Jリーグ特任理事の小野伸二さんをメイン講師に迎え、小野さんだからこそ伝えられるサッカーの楽しさや喜び、素晴らしさを感じていただくこと、サッカーを通して気候アクションの重要性を理解していただくことを目的に、小学生の子どもたちを対象とした「サッカー教室」と「サステナトーク」を2024年より実施。

ステークホルダー関係図・役割



実施インパクト

2024年度（2024年4月～2025年3月）

活動回数と保護者含む参加人数

※カッコ内は子どもの数

20回
約5,860人 (2,371人)

イベント実施後に“温暖化、気候変動に興味を持った”と回答した参加者の割合※1

89.0%

※1 2024年度全20回の実施後、参加者を対象にアンケートを実施し、5段階評価で上位2段階の回答をした人の割合から算出



参加者の声

● 当時8歳の男の子と、その父親からの感想

（息子談）僕が変われば、お父さんお母さんお兄ちゃん、先生、仲間、友達、みんなも変わってくれると思う。サッカーずっと続けられるようにしたい。地球を汚さない、ゴミを出さない、モノを大切に長く使いたい。

（父親談）この気持ち、考えを常に持ち続けてもらえるように私も意識付けしていきたい。

● 他保護者からの感想

子どもと一緒に地球について置かれてる現状について考えるきっかけをいただきました。自分たちができることからコツコツと。みんなの意識が変われば世界も変わる。Jリーグ観戦に行くたびにその意識づけを気づかせてくださる、とても嬉しい仕組みです。楽しむ、ためにはどうしたらいいの。それは、楽しめる仲間をたくさん作る。こと。なんですね。きっと。Jリーグファミリーとして、日々楽しんで前向きに目の前のひとつずつから取り組んでいきます。

2. 気候アクション | Jリーグとパートナー企業の活動事例

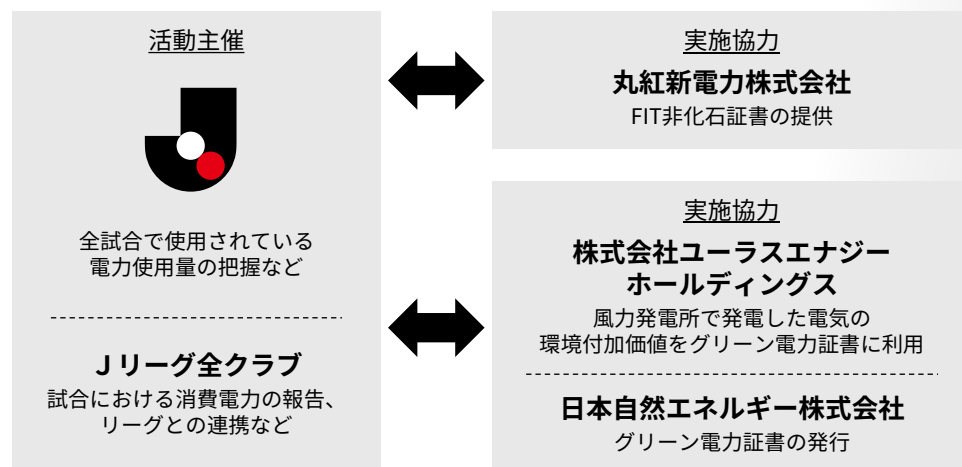
電力由来のCO2排出実質ゼロで全公式試合開催

■実施概要

Jリーグ全公式試合（年間約1,200試合）で、以下パートナー各社が所有するFIT非化石証書・グリーン電力証書を活用し、会場で使用する電力を再生可能エネルギーでまかなうことで、温室効果ガス排出量をゼロにする取り組み。2023年より継続実施中。

※ただし、期間中に既に再エネ・実質再エネ電力を調達しているスタジアムにおける試合を除く

ステークホルダー関係図・役割

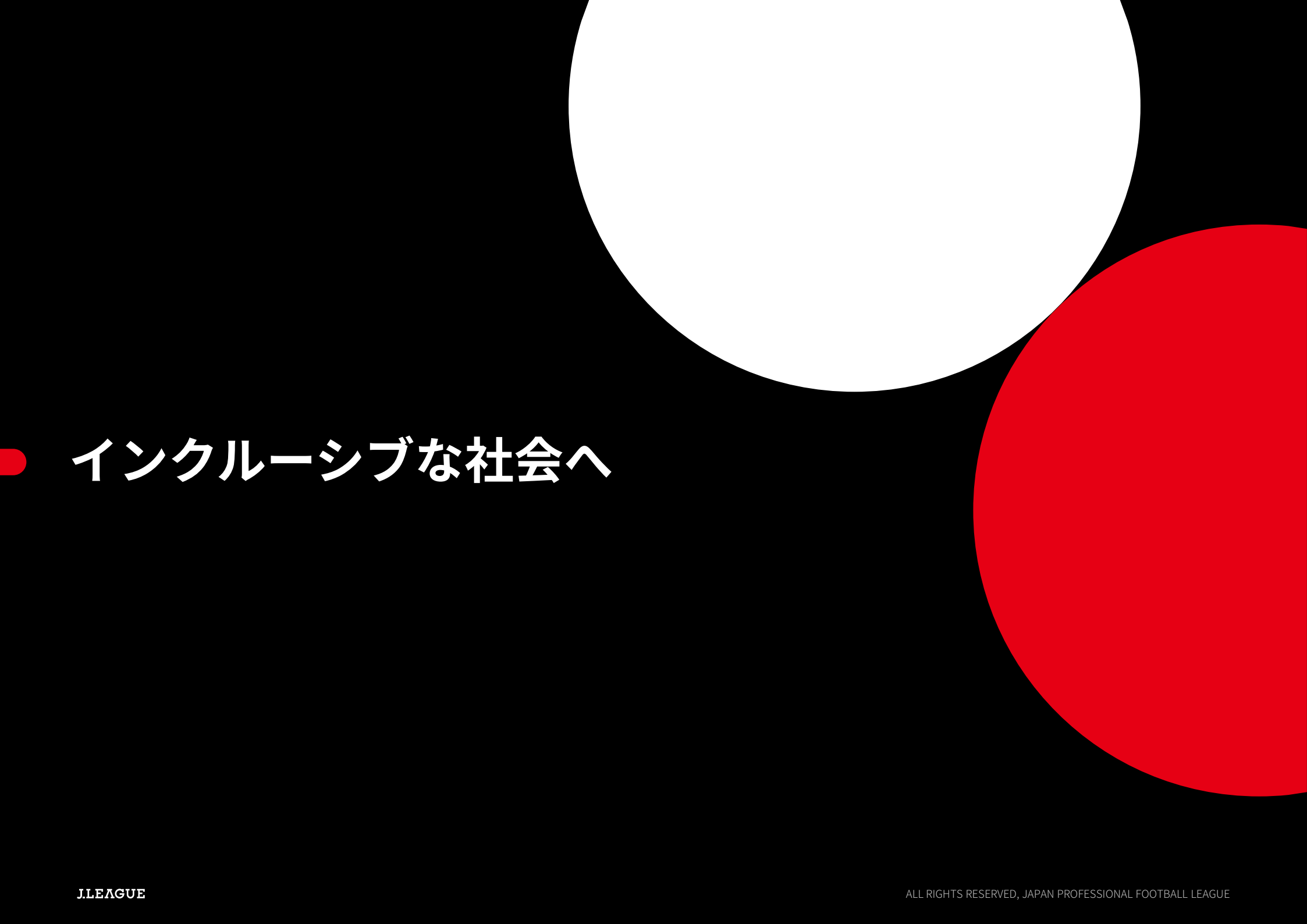


※クラブが自主的に実施した試合も含む

実施結果

2024シーズン公式試合開催に伴うScope1,2におけるCO2排出量のうち約70%が電気由来であり、それらを全て実質再生可能エネルギーとすることで、CO2排出量をゼロにしている。 ※2023シーズンにおいても上記同様





インクルーシブな社会へ

3. インクルーシブな社会へ ロードマップ

短期

>>>>>>>>>>

中期

>>>>>>>>>>

長期

目指す状態

～理解と共感が深まる～

スタジアムで実現したいこと

- ・スタジアムでの応援、クラブのイベントや運営を通じて、多様な人々・多世代（老若男女や障がいのある方、外国人など）の交流が広がっている

地域で実現したいこと

- ・クラブがハブとなり、多様な人々・多世代の交流機会が増え、理解と共感が深まっている

指標

- ・目的別※1の実施クラブ数
- ・目的別の活動開催回数

目指す状態

～行動につながる～

スタジアムで実現したいこと

- ・交流の広がりによって多様な人々・多世代が関わり、理解し合う機会が増え、共に楽しむ姿勢がスタジアムで定着している

地域で実現したいこと

- ・クラブがハブとなり、多様な人々・多世代が理解し合う機会が増え、周囲を思いやる・助け合う行動をする人が増えている
- ・日々の生活の活力につながり、生きがいを感じる人が増えている

指標

- ・目的別※1の実施クラブ数
 - ・目的別の活動開催回数
- 追加指標を検討中※2

目指す状態

～文化が根付く～

スタジアムで実現したいこと

- ・多様な人々・多世代が共に楽しめる環境が確立され、支え合う文化が根付いている

地域で実現したいこと

- ・クラブがハブとなり、他者との良好な関係が構築され、思いやりの精神が育まれ、多様性を尊重する文化が広がっている
- ・自己肯定感が向上し、社会で活躍する人が増えている

指標

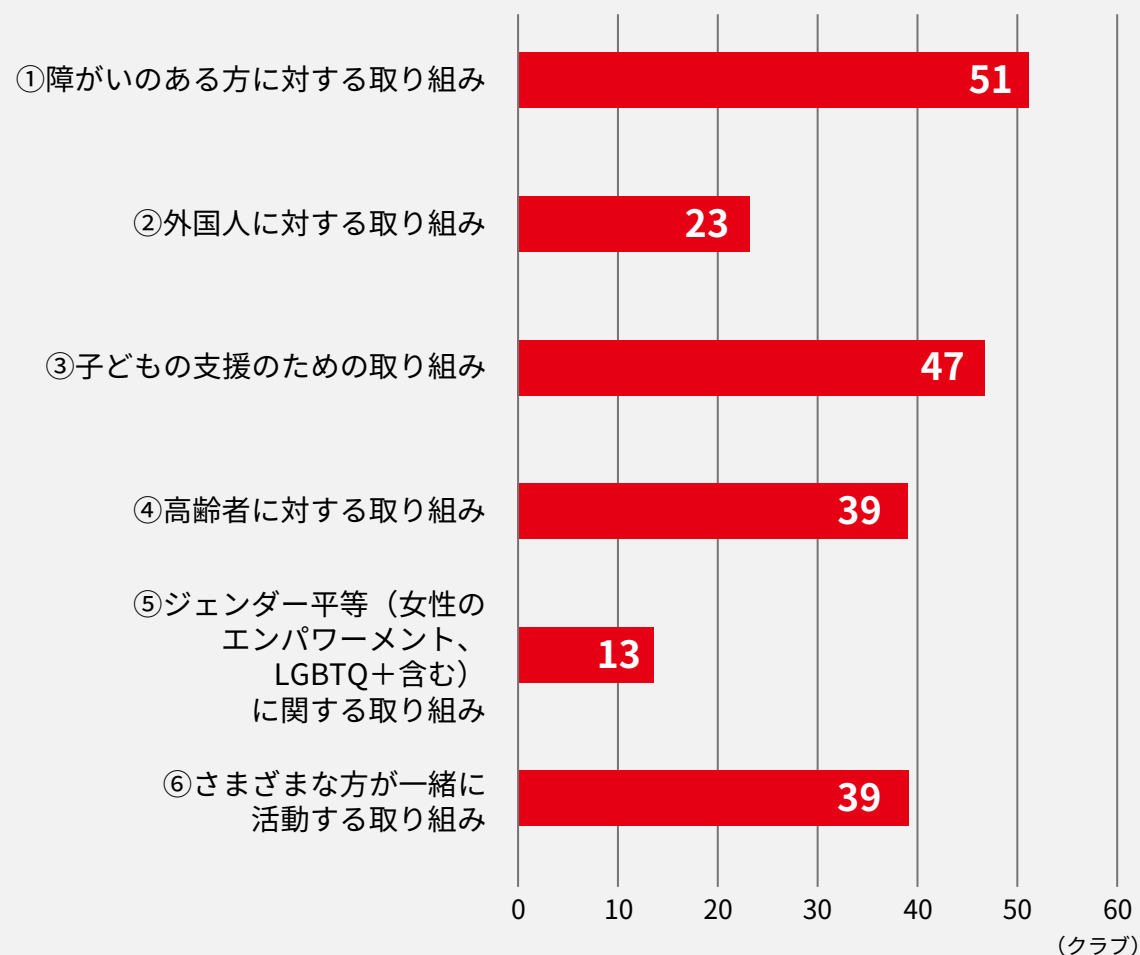
- ・目的別※1の実施クラブ数
 - ・目的別の活動開催回数
- 追加指標を検討中※2

※1：「障がいのある方」、「外国人」、「子どもの支援」、「高齢者」、「ジェンダー平等」、「さまざまな方が一緒に活動」の大きく6つの目的に、クラブが行っている活動を分類している
 ※2：中期以降は、活動の“質”を評価出来るような指標を「Jリーグ」として検討していきたいと考えている

3. インクルーシブな社会へ 目的別クラブの取り組み実施状況

本テーマにおける目的別クラブの取り組み実施状況

集計対象：J1～J3の全60クラブ



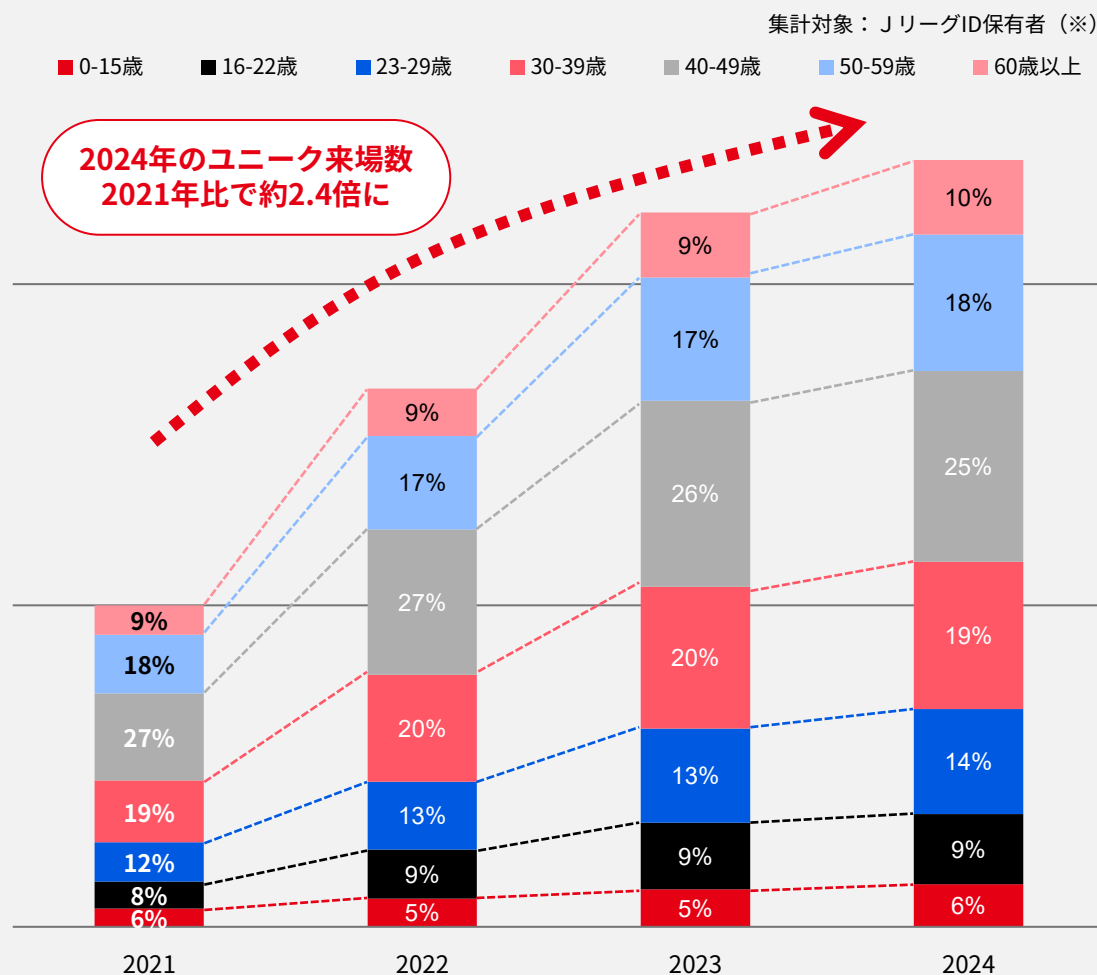
- リーグ全体として、全ての目的に対して幅広くクラブが取り組みを行っている
- 左記①③④⑥については約3分の2以上のクラブが取り組めており、一方で②と⑤の数はまだ少ない

リーグとしては、全体として現対応がまだ不十分だと認識しており、有識者などのさまざまな意見を取り入れながら中長期的な目標を2025年度に策定予定。

今後は、個々の課題をきちんと認識した上で、理想とのギャップを埋めていくような取り組みや、活動の質を高めていくことを推進していきたいと考えている。

3. インクルーシブな社会へ 来場者データ

公式試合の年齢別ユニーク来場（※）における年代別割合の推移



- コロナ禍以降、全体の来場者数は増加し続けている
- 特に30代・40代・50代が来場者数の増加をけん引しているが、“15歳以下の子ども”は全体の約5.5%、“60歳以上の高齢者”は約9.7%であり割合は少ないため、多様な世代が来場し、交流を楽しんでもらうようなスタジアムでの観戦体験やその工夫などを継続していきたい

そのため、まずリーグ全体でどのような観戦エリア・スペースを来場者へ提供しているのかを把握する取り組みを2025シーズンより実施予定。

※ JリーグID保有者の補足

Jリーグチケットでの発券をした・来場記録を付与した方のデータのため、クラブ独自の販売チャネルや他プレイガイドでの購入者のデータは含まれません。また、人数はユニーク数となるため、複数回来場されている方でも1人としてカウントしています

3. インクルーシブな社会へ クラブの活動事例

障がいのある方に対する取り組み

福島ユナイテッドFC



手話応援デー

試合中の手話を活用した応援と試合前にデフサッカー教室を実施し、障がいの有無に関係なく、より多くの人が楽しめる空間づくりを実施

水戸ホーリーホック



「水戸ホーリーホックノスフェアビデ」の設立・運営

「農業×福祉×スポーツ」の連携による障がい者支援の推進。パートナーと連携し、知的障がい者サッカーの全国大会も開催

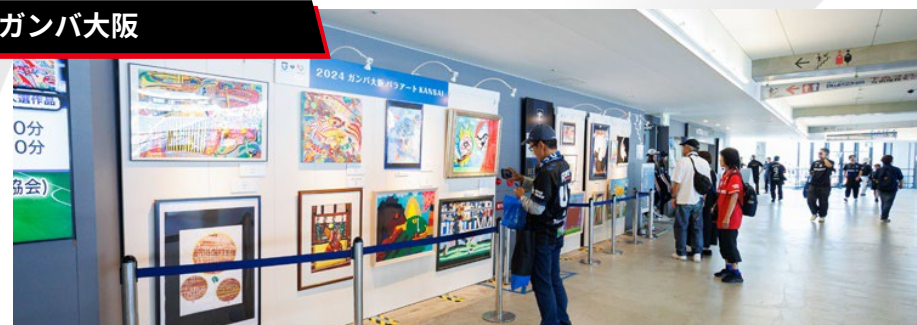
ツエーゲン金沢



Future Challenge Project

「障がい者の方と共に観戦を楽しむ」ことを目的に、地域の各団体・企業・大学と連携した試合観戦・啓発活動

ガンバ大阪



ガンバ大阪 パラアートKANSAI

障がいをお持ちの方が描いた絵をホームゲーム2試合でコンコースに展示。社会の多様性と包摂性を促進する目的で、来場者に一般公開

3. インクルーシブな社会へ クラブの活動事例

外国人に対する取り組み

ベガルタ仙台



タイの子どもたちにベガルタ仙台を届けよう！

使用しなくなったベガルタ仙台グッズを寄付いただき、タイのスラムや難民キャンプで暮らす社会的に弱い立場の子どもたちに直接届ける取り組み

ザスパ群馬



ザスパインターナショナルカップ

「サッカーを通じて言葉の壁を越えていく！」をテーマに、群馬県内に住む外国籍の方と日本人の交流を目的としたサッカー大会を開催

名古屋グランパス



SDGsアカデミー在留ブラジルキッズプロジェクト

U-18選手がブラジルキッズの状況を学び・考え・実践するプログラム。
U-18公式試合にキッズを招いた交流イベントも実施

藤枝MYFC



MYFC ふっとさる かつぶ

クラブを軸とした企業間の交流を目的に、ホームタウンの企業で働く外国人（技能実習生）を対象としたフットサル大会を開催

3. インクルーシブな社会へ クラブの活動事例

子どもの支援のための取り組み

ジュビロ磐田



ヤマハスタジアムさんぽ会

医療的ケアを必要とする子どもとその家族を対象に、家族間や医療・福祉関係者との交流を目的としたピッチ周り・スタジアム内の散歩やボールを使ったレクリエーションを実施

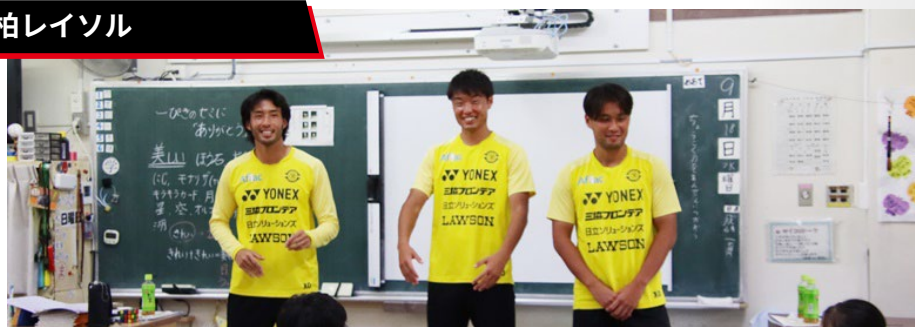
レノファ山口FC



子どもの体力向上推進プロジェクト

専門家による運動教室、健康教室や、新体力テストの測定に選手が参加し、楽しみながら運動習慣の定着を図る活動を実施

柏レイソル



「子どもの権利」推進活動

子どもの権利の普及啓発活動として、パートナーと連携し、小中高校などで活用できる教材を開発。これを用いて実際に小学校での授業も実施

テゲバジャーロ宮崎



愛あるごはんを届けようプロジェクト!

ホームゲームが開催されるたびに協賛企業より食材を頂き、地域ネットワーク団体を通じて子ども食堂に届ける取り組み

3. インクルーシブな社会へ クラブの活動事例

高齢者に対する取り組み

ロアッソ熊本



ロアッソ・ウェルネス・プログラム

誰もが参加しやすく、新しい仲間をつくりながら楽しんで、運動の大切さを実感し、習慣化していくことを狙いとした介護予防プログラムを提供

いわきFC



選手と一緒に学ぼう！認知症サポーター養成講座

選手やクラブスタッフが「認知症サポーター」になることで、自らが認知症を正しく理解し「認知症になっても、できる限り住み慣れた場所で、安心して、自分らしく暮らせるまちづくり」の実現を目指す活動

カターレ富山



Be supporters! アウェイバスツアー

ホームゲームだけでなくアウェイゲームも観戦してみたいという要望に応え、隣県のツエーゲン金沢との「北陸ダービー」で事前募集した施設利用者・関係者と共にアウェイバスツアーを実施

AC長野パルセイロ



高齢者の楽しいプログラム体操

地域の高齢者が介護予防活動に取り組む自社グループ団体を訪問し、体操やボールを使って楽しく体を軽く動かし、フレイル予防に取り組む活動

3. インクルーシブな社会へ クラブの活動事例

ジェンダー平等（女性のエンパワーメント、LGBTQ+施策含む）に関する取り組み

V・ファーレン長崎



アスリートの言葉を通じてジェンダーについて考える

トランスジェンダーのアスリートを招き、自身の経験をお話いただくことでスタジアム全体でジェンダーについて考えるきっかけとなるトークイベントを開催

サンフレッチェ広島



広島県と「女性活躍推進に関する協定」締結

協定に基づき、広島県と共に女性活躍推進の実現に向けた取り組みの一つとして、サンフレッチェ広島トップチーム全員が、イクメン推進アンバサダーに任命

FC岐阜



サッカーフィットネス

中学生以上の女性を対象として、健康な身体づくりを目的に、サッカーを通じたエクササイズを実施。女性だけでサッカーと触れ合う貴重な場を提供

3. インクルーシブな社会へ クラブの活動事例

さまざまな方が一緒に活動する取り組み

FC今治



アシさとクラブプロジェクト

スタジアムを拠点に、子どもから大人、初心者から上級者まで一緒に取り組める健康・スポーツのイベントを定期開催

ギラヴァンツ北九州



ギラヴァンツオープンマインドプログラム

幅広い年代のひきこもりがちな方々を対象に、“応援”、“運動”、“ボランティア活動”で心を開き、社会とつながり、自信を取り戻すためのプログラム

サガン鳥栖



SAGAゆるキャラ&パラスポ&キッズスポーツフェスティバル

ゆるキャラたちと、子どもたちが一緒にチームを組んで、競争したり、パラスポーツを楽しむことができるスポーツ・遊びの体験型インクルーシブイベント

Y.S.C.C.横浜



Y.S.C.C.ファーム×寿地区コラボ健康講座

寿地区に暮らす方々を対象に、生活改善・自己啓発のための健康講座を開催。アルコールや薬物依存だった方への改善プログラムなども提供

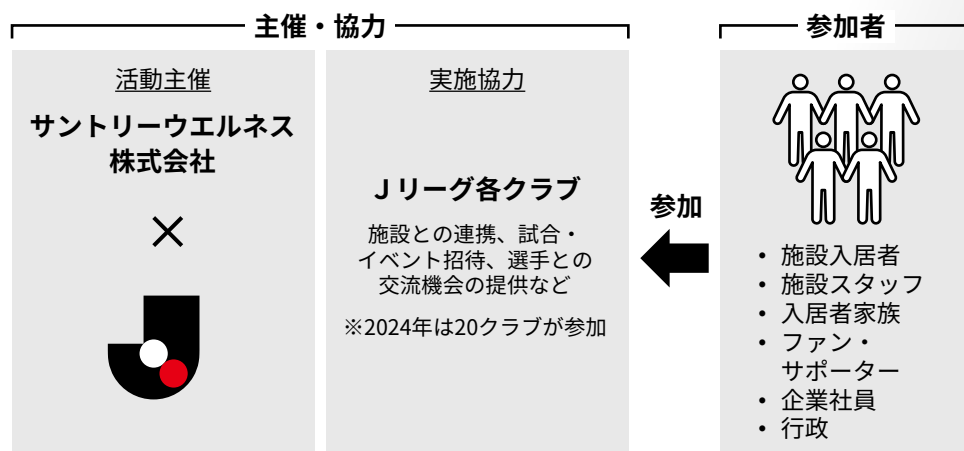
3. インクルーシブな社会へ Jリーグとパートナー企業の活動事例

Be supporters ! (以下、Beサポ!)

■実施概要

高齢者施設で過ごす高齢者や認知症の方など、普段は周囲に「支えられる」機会が多い方が、サッカークラブの「サポーター」になることで、クラブや地域を「支える」存在になっていくことを目指すプロジェクト。「支えられる人から支える人へ」をコンセプトとして、2020年12月にサントリーウエルネス株式会社が4つのJクラブと協働してスタートし、2024年には計20クラブが参加。「いくつになってもワクワクしたい、すべての人へ。」という言葉の下に、その輪が広がり続けている。

ステークホルダー関係図・役割



実施結果

連携したエリア、施設の数および参加人数 (2020～2024年延べ数)

全国27エリア 約230施設 約10,000人以上



Beサポ! 参加高齢者の変化



◀ 80代女性

認知症の状態にあるが、大好きなイニエスタ選手（スペイン出身）のために、スペイン語を勉強し始めて「**VAMOS Iniesta**（さあいこう、イニエスタ）」とエールを送った



◀ 90代女性

施設で過ごして10年。認知症が進行し、ご家族の顔が分からず、真顔のときが多いが、**Beサポ!**で皆が大笑いしているのを見て自然に笑顔になり職員を驚かせた。

写真提供：高齢者総合福祉施設 オリンピア兵庫

Beサポ! への共感の声



京都大学
人と社会の
未来研究員教授
内田 由紀子先生

Beサポ!の素晴らしいところは、「支えられる」ことの多い人が「支える」側に回ること。みんなで応援することで自分の存在を認めたり、高齢者同士や職員の方、家族、サポーターとつながるきっかけになり、社会の中での居場所を見つけやすくなります。その結果、幸せを感じられる時間が増えるのだと思います。そして、幸せに年齢を重ねる方が増えることで、高齢者だけでなく周囲の人にも幸せが伝播していきます。若い人にとっても「幸せに生きる」を考える手がかりになるのではないのでしょうか。



地域コミュニティの醸成

4. 地域コミュニティの醸成 | ロードマップ

短期

>>>>>>>>>>

中期

>>>>>>>>>>

長期

目指す状態

～関心が高まる～

スタジアムやクラブの関連施設、地域におけるクラブをハブとした活動を通じて

- ・ コミュニケーションを取る機会が増え、お互いの関心が高まっている
- ・ 地域住民同士の協力関係が育まれ、地域を支える意識が広がっている

指標

ホームタウン活動の実施回数

目指す状態

～活動が活発になる～

スタジアムやクラブの関連施設、地域におけるクラブをハブとした活動を通じて

- ・ ファン・サポーター同士が声を掛け合うようになることで地域社会のつながりが深まっている
- ・ 地域課題の解決や、地域社会の発展に積極的に取り組む人々が増え、コミュニティ活動が活発になっている

指標

ホームタウン活動の実施回数

追加指標を検討中※1

目指す状態

～日常的に支え合う～

- ・ スタジアムやクラブの関連施設が地域住民の交流の場として定着し、そこで生まれたコミュニティが地域社会に欠かせない存在になっている
- ・ 地域の人々の相互理解が深まり、楽しみながら人とつながり続けている人が増え、地域への愛着や誇りがあふれている

指標

ホームタウン活動の実施回数

追加指標を検討中※1

※1：中期以降は、活動の“質”を評価できるような指標をJリーグとして検討していきたいと考えている

4. 地域コミュニティの醸成 | ホームタウン活動調査

Jクラブは、毎年多くの、多岐にわたる目的でホームタウン活動に取り組んでおり、地域の発展や課題解決において欠かせない存在となっている

60クラブ全体集計

ホームタウン活動
年間実施回数

32,135回

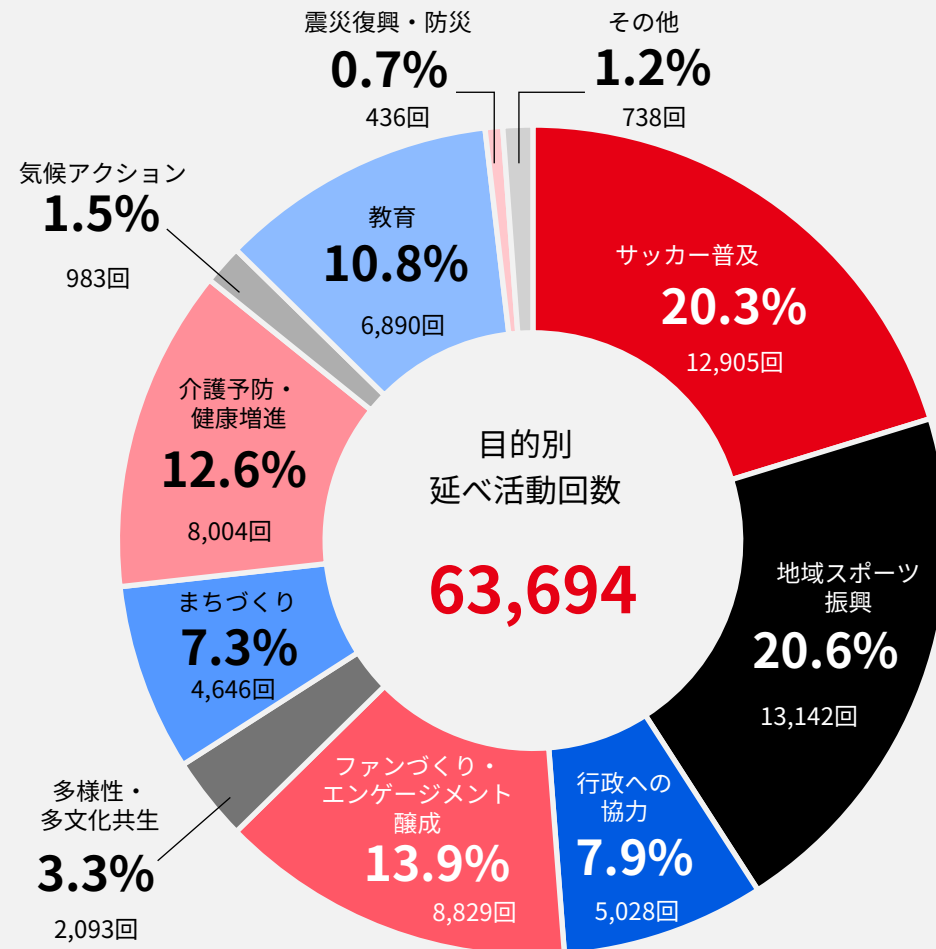
うちシャレン！活動回数

3,775回

※3者以上で共通の社会課題へ取り組む手法

活動目的の構成

※各クラブが実施したホームタウン活動を、クラブからの報告に基づいて集計
※「活動目的」は、1つの活動につき複数選択となるため、延べ活動回数を表示



4. 地域コミュニティの醸成 | 2025 Jリーグシャレン！アウォーズ受賞活動

ホームタウンにおけるシャレン！活動により、クラブの存在意義の1つといえる地域コミュニティを醸成していく活動をさらに推進している

FC東京

ソーシャルチャレンジャー賞

その地域にある社会課題解決に対して
チャレンジしている活動

「NO PLANET, NO TOKYO」が描く未来。
少年たちの夢を育む「HIGH HOPE」

2016年から継続して実施してきた多摩少年院の少年たちに対する更生と社会復帰の協力をバージョンアップした、少年たちが社会の一員として歩む力を養うプログラム。



V・ファーレン長崎

メディア賞

記者として、自身の媒体に取り上げたいと思う活動

被爆地のプロスポーツクラブ（Jリーグクラブ・
B.LEAGUEクラブ）として、自治体・高校生と共に日本全
国、世界、そして次世代へと発信する平和へのメッセージ

2025年に被爆80年を迎える被爆地のプロスポーツクラブとして
発信を続けることを使命と考えるクラブが、トップチーム選
手・スタッフ・高校生と共に行う平和学習。



4. 地域コミュニティの醸成 | 2025 Jリーグシャレン！アウォーズ受賞活動

ホームタウンにおけるシャレン！活動により、クラブの存在意義の1つといえる地域コミュニティを醸成していく活動をさらに推進している

サンフレッチェ広島

パブリック賞

国や自治体が掲げる政策を活用し、地域の課題解決に向けて、多様なステークホルダーと連携し、持続可能な活動となるように取り組んでいる活動

“街なかスタジアム”開業に伴う、横川商店街の逆襲

新スタジアム開業に伴う基本のアクセスルートから外れてしまった旧スタジアムのシャトルバス発着地を新スタジアム下でも盛り上げる活動。



ヴァンラーレ八戸

明治安田 地元の元気賞

地域社会とのつながりの創出をテーマにした活動であり、地域住民を元気にした取り組み

ヴァンラーレ八戸「School Trip Day」

ホームタウンの子どもたちに教育的価値を提供すること、社会科見学の多様化の体現、自分たちが住む街にプロスポーツチームがあることを知ってもらうきっかけとして、ホームゲームをホームタウンの小中学生のための社会科見学と遠足の場に。



4. 地域コミュニティの醸成 2025 Jリーグシャレン！アウォーズ受賞活動

ホームタウンにおけるシャレン！活動により、クラブの存在意義の1つといえる地域コミュニティを醸成していく活動をさらに推進している

モンテディオ山形

クラブ選考賞

各Jクラブが、自クラブ、自地域でも実施したいと思える活動

「“声”のチカラを起点に高齢者が輝き活躍する地域へ」
O-60モンテディオやまびこ

アクティブシニアを対象とした声磨きトレーニングやスタジアムでのあいさつ運動を通じ、健康の向上、新たなつながり、活躍の機会を創出。



アビスパ福岡

ファン・サポーター選考賞

自身が応援しているクラブの地域でも実施してほしいと思える活動

2,000人の“一歩”が次の日からの日常を変えていく！
「TAKE ACTION Week！」

ホームゲーム時に2,000人以上が参加できるイベントやワークショップに当事者として関わることで、翌日以降に課題解決のための一歩を踏み出す機会を創出。企画運営にも多種多様な方が携わり、シャレン！をビジネスとしても体現するアクションを起こした。



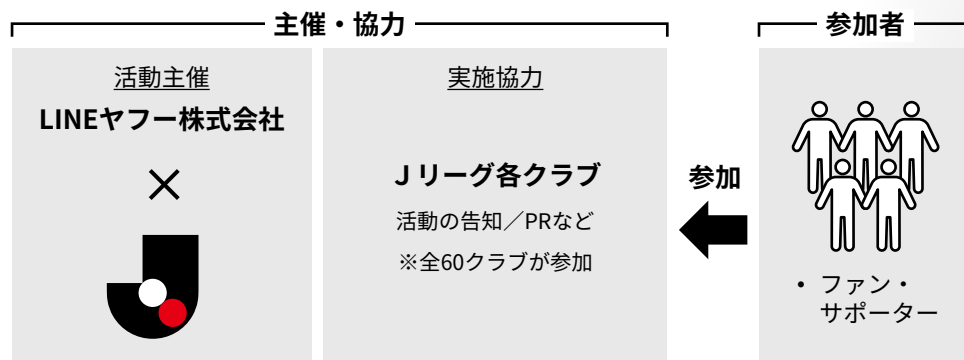
4. 地域コミュニティの醸成 Jリーグとパートナー企業の活動事例

ソナエルJapan杯

■実施概要

防災意識を高めることを目的に、LINEヤフー社が提供する「ヤフー防災模試」（速習編／地震編／台風・豪雨編）をJリーグ、Jクラブのファン・サポーターがスマートフォンで受験し、「勝ち点」をクラブ間で競い合う取り組みを2021年に開始。「勝ち点」は受験成績やクラブのSNS投稿へのリアクション数に基づき付与。災害時に生き抜く知識やスキルを学びながらクラブを応援し、災害に強い地域を増やしていく。

ステークホルダー関係図・役割



実施インパクト

ソナエルJapan杯参加人数（2021～2024年延べ数） **約273,000人**

ヤフー防災模試

「阪神・淡路大震災30年特別編」
の受験データ

（集計対象期間
2025年1月14日～2月5日）

全体平均：**66.6点**

ソナエルJapan杯参加経験者：**71.2点**

→後者の得点が高い＝
ソナエルJapan杯を通じて防災知識が
身に付いている



4. 地域コミュニティの醸成 Jリーグとパートナー企業の活動事例

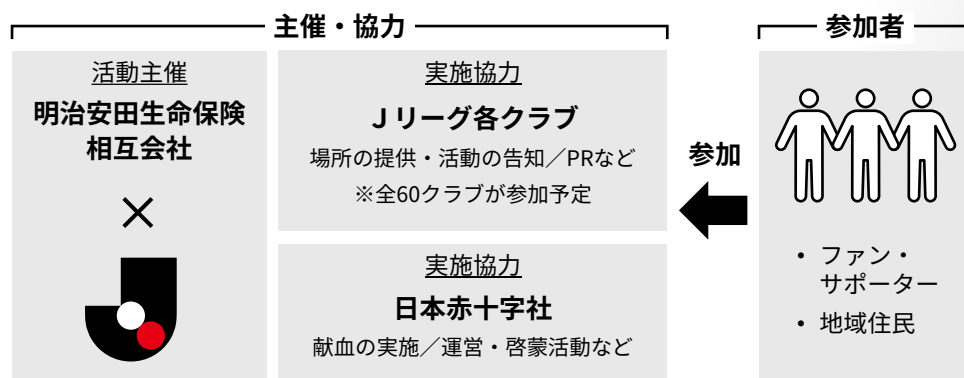
シャレン!で献血

シャレン!で献血

■実施概要

若い世代の献血が減少傾向である社会課題を踏まえ、日本赤十字社協力の下、Jリーグ全クラブと共に献血の啓発活動を行う「シャレン!で献血」を2023年より全国で展開。明治安田の従業員による地域の皆さまへの献血ルームの案内活動や、Jリーグのファン・サポーターやスタジアム来場者に向けた試合当日の献血バスのスタジアム誘致活動などを通じて、定期的な献血を促進する。

ステークホルダー関係図・役割



実施結果

献血協力者数（2023～2024年延べ数） **25,000人以上**

スタジアムでの献血案内活動に協力した
Jリーグ選手OB **117人**
(2024年4～12月実績)





2024シーズンの振り返りと今後の展望

2024シーズンの振り返りと今後の展望

巻頭でチェアマンが触れている通り、1993年のJリーグ開幕以来、私たちは一貫して「地域密着」を掲げながら、地域の中にあるさまざまな困りごとや課題に向き合い、より多くの方々に笑顔があふれる地域社会の実現を願って活動を続けて参りました。その間、活動を共にしていただいた自治体、パートナー企業、NPO等の各団体や各施設、学校を始めとする教育機関等の関係者、そしてファン・サポーターの皆さまに、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。皆さまの存在なくして、Jリーグが32年という歴史を刻むことは不可能だったという想いを今、新たにしております。

また、30周年を迎えた2023年の初めには、次の10年、20年、30年という先を見据えて、「経済的にも、社会的にも、環境的にも」持続可能な地域を皆さまと共につくっていくために、受け継がれてきた想いはそのままに、従前の「社会連携部」の器を大きくする形で「サステナビリティ部」を発足いたしました。

初年度の2023年は、主にJリーグ組織内での理解を深めることに力を注ぎました。試合運営、経営企画、広報、マーケティング、PR、コンプライアンス、商品化事業など、さまざまな機能を担う全ての部門が一丸となって取り組まなければ、先に述べた持続可能な社会を作ることには難しいからです。そうした観点から、まず、私たちが、なぜ、誰と、いつまでに、どんな取り組みを進めるのかを明らかにするために、本レポートにも記載した全体ロードマップを作成しました。2024年以降は、理解の輪を社外にも広げつつ、ロードマップに照らしながら、本レポートでもご紹介してきたさまざまな具体的アクションを、ステークホルダーの皆さまと共にひとつずつ進めて参りました。

Jリーグは、未来世代が今と同じように、もしくは、それ以上にサッカーをはじめとするさまざまなスポーツを楽しむことができる社会と自然環境を守っていくために、これからもサステナビリティ向上のための取り組みに邁進いたします。引き続き、Jリーグのサステナビリティ活動にご理解を賜りますよう、そして、さまざまな取り組みやプロジェクトを通じて共に前進していただけますよう、よろしくお願い申し上げます。



Jリーグと共にサステナビリティを推進するパートナー各社



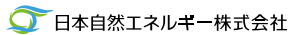
PLANET 気候アクション



NTTグループの持つテクノロジーを用いて、ファン・サポーターや市民が気候アクションに参加・継続しやすいシステムをつくり、人々の日々の行動変容を実現する。

明治安田

「明治安田×Jリーグの森 ～未来をつむぐ森～」として、明治安田生命保険相互会社と森林における取り組みを協働で実施し、各地域の方へ気候変動対策の必要性を知ってもらうきっかけづくりを行う。



丸紅新電力株式会社より提供を受けたFIT非化石証書、および株式会社ユーラスエナジーホールディングスが所有する風力発電所が生み出す電気の環境付加価値を日本自然エネルギー株式会社が証書化したグリーン電力証書の提供を受け、2024年のJリーグ公式戦全1,200試合で使用した電力を実質再生可能エネルギーとすることで、温室効果ガス排出量をゼロにする。



株式会社エスプールブルードットグリーンは、Jリーグが運営する地域再生可能エネルギー推進助成制度の業務支援や、気候アクションに関する顧客基盤を活用したJリーグと自治体の連携強化を行う。



KPMGコンサルティング株式会社は、サステナビリティ領域、およびスポーツビジネス領域におけるさまざまな知見やノウハウを活用した気候アクションの活性化を行う。

Jリーグは、2023年度より新たなパートナーカテゴリーとして、気候アクションに特化した「Jリーグ気候アクションパートナー」を新設しており、上記企業はそのパートナー各社



PEOPLE インクルーシブな社会へ



サントリーウエルネス株式会社は、複数のクラブと連携して「Be supporters! (サポーターになろう!)」プロジェクトを2020年12月に始動し、取り組みを拡大し続けている。



COMMUNITY 地域コミュニティの醸成

明治安田

明治安田生命保険相互会社は、日本赤十字社協力の下Jリーグ全クラブと連携しながらスタジアム来場者や地域の人々に向けた献血活動を行い、定期的な献血の実施を促進している。

LINEヤフー

LINEヤフー株式会社は、地域の人々の防災意識を高めることを目的とした、Jクラブ対抗企画「ソナエルJapan杯2024」を実施している。

Jリーグ インパクトレポート2024



サステナビリティ活動に関する報告書

発行日	2025年5月
発行人	野々村 芳和
発行所	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ（Jリーグ） 〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-1-1 明治安田生命ビル8F https://www.jleague.jp/
写真	Jリーグ
制作・編集	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
制作協力	KPMGコンサルティング株式会社

本書の無断複写複製（コピー）は、特定の場合を除き、著作権の侵害となります。

J.LEAGUE IMPACT REPORT 2024



本レポートは日本財団の助成事業となります

版数	発行日	改訂履歴
第1版	2025年5月27日	初版発行
第1.1版	2025年5月30日	P13：短期・中期・長期の年号を追記